

スコップでやった人もあった。」（そのようにタヂやカナベラで掘る人もあれば、スコップで掘った人もありました）。また、「オナゴだば（掘るのを）見だごどねな」（女性がサルケ掘りをするのは見たことはありません）といい、採掘は男性の仕事であったという。

掘り取るサイズは一枚あたり30cm～25cm、厚さ15cm程度だった。それらをオガ（陸）に並べて乾燥させた。「チャックどならべで、乾かしたもんだ。乾げば、手で割って火さくべだ。」（整然と並べて乾燥させたものですよ。乾くと手で割って火にくべました。）



写真34 鶴田町木筒

サルケのほかにも、さまざまなものを燃料として用いた。「リンゴの枝も燃やした。シクサ山さ行ってカポシ取って乾がして焚いだもんだね。他に米のもみがら。薪のない人は、なんだかだ焚いだ人もある。」（リンゴの枝も燃やしました。馬の飼料とする草を刈る山に行き、その草を刈り取ったあとに残った木を採って乾かして焚いたものですよ。他には米の籾殻。薪のない人であれば、何でもかんでも焚いた人もありましたよ。）

サルケはシボドで使い、主に暖房に用いた。「サルケでボーボーど燃えるもんでねもの」（サルケというものは、ボーボーと燃えるものではないので）、炊飯には使わなかった。炊飯にはカポシを用いた。

煙がひどかった。「けむりいぶてで、ツラ見えねだげ、わがねだげ、いぶるもんだ。いぶてまでオギになればアレだばってな。」（煙がくすぶって、顔が見えないほど、わからないほど、くすぶるものです。煙がすっかり出てしまつて燠火になると、収まりますけどね。）（2014年11月1日取材）

松木明は「サルケは西・北津軽郡、ことに十三湖附近に多かったが、そのうちでも知られたのが廻堰の大溜池であった。この附近の村ではつい最近まで燃料として薪を用いず、みなサルケを焚いていた」と記し、鶴田町の廻堰大溜池がサルケの一大産地であったと述べている³⁰⁾

④鶴田町木筒 n氏 昭和3年生 男性



写真35 「フトソリ」。サルケの運搬にも使用した。棒は操縦を容易にする工夫。

26歳の時に現住所へ婿入りをした。出身地の五所川原方面では、山に近く、柴に恵まれていたのでサルケはあまり焚かなかったが、当地へ来てからはサルケを採掘し、燃料として用いた。

サルケは廻堰の溜池から採掘した。秋に溜池の水がなくなつたところにおこなつた。今（注：取材当日、11月1日）はもう切り終わったところである。

「水ねぐなつてまつて、浅瀬のどごに、カヤの根だの古しいやづガパど根っこあつて。土まじりの草の根だでばな。それち

ょうどいぐ、一尺四面に切れるもんだねな。それ干してろー。あつしてな一。」（水がなくなつてしまつて、浅瀬のところに、カヤの根やそれが古くなったものが、ガッポリと、根っこがあつて。土混じりの草の根ですよ。それをちょうど良く、一尺四方に切ることができるものです。それを干してねえ。焚くと熱くてねえ。）

女性は、クバる（運ぶ）のを手伝った。溜池はその季節になるとぬからないので、フトソリ（写真35）を使って運搬した。家の軒下など雨の当たらない風通しのいいところに、崩れないようにチャツと（整然と）まとめておいた。

サルケはロブヂで主として暖房に用いた。炊飯には稲ワラを用い、ナベを使用した。n氏の近隣では「サルケでママ炊いだ人もあべおん」（サルケで飯炊きをした人もあるでしょう）とのことである。

「ワラのアグな、フタさ上がつてな。それでも慣れであつたどごで、そのママ食つたもんだもの。」（稲ワラの灰がね、鍋の蓋に上がつてね。それでも慣れてしまつていたものですから、その（灰の入つた）ご飯を食べたものですよ。）

燠になったサルケはコタツに使つた。

④鶴田町鶴田 o氏 昭和16年生 男性

「サルケ」は、鶴田でも使っていたとお年寄りから聞いている。シモ（岩木川に沿って鶴田町よりもより下流の地域）のほうから持ってきたとか、廻^{まわりぜき}堰の溜池からも取った人がいたという話を聞いた。しかし、o氏は町（鶴田町中心部）の生まれなので、使わなかったし、使っているのを見たことがなかった。

3反歩を耕す小作農家であったo氏が小学校4年から中学1年ころまでは、たびたび^{とがわ}十川へ流木を拾い集めに行き、それを燃料に使った。「孫ババ腰曲がってまってるのリヤカーさ乗へで、拾いに行ったもんだ。あの頃は学校さ行っても行がねしてもなも言わね。」（腰の曲がった孫ばあさんをリヤカーに乗せて、拾いに行ったものです。当時は学校に行こうが行くまいが、何も言われませんでした。）

リンゴを栽培している人はリンゴの木の枝を使用できたが、そうでない人は、川から流木を拾って貯めておいたり、製材所のザパ木（廃棄されるような雑多な木材）や木の皮をもらってきて燃料にした。

流木はシボド（炉）で焚き、暖房のほかに飯炊きも「シボドでばり」（もっぱら炉で）用いた。カデメシ（混炊）ではなく、米だけの飯を食べた。（2014年11月1日取材）



写真36 燃料用に貯えられたリンゴの剪定枝(鶴田町)

④鶴田町横范 p氏 昭和7年生 女性

鶴田町横范 q氏 昭和10年生 女性 両氏は姉妹である。

「サルケ」と称した。マジエギ^{まわりぜき}（廻^{まわりぜき}堰大溜池）のヤチでも採掘されていた。p・q氏の家では、両親が車力の^{せんがん}千貫から、リンゴとバグって（交換して）入手し、マグルマ（荷馬車）やソリで運搬した。一枚は重箱ほどの大きさで、5～10枚を縄でマルグって（縄で束ねて）運んだ。家の小屋の中に保管しておき、シボド（炉）で暖房に使用した。ツケギに火をつけて、その上にサルケを置いて着火した。

「ぬげものな。したってな。火見ただけでもな、こうこうってな。今のどごだ、ハワイの溶岩みてたもんだ。」（暖かいのですものね。そうは言ってもね。火を見ただけでもね、こうこうとしてね。今のどこですか、ハワイの溶岩みたいなものですよ。）

テドリを沸かすのにもその火を用いたが、炊飯には用いなかった。炊飯は、屋外で三本足にナベをかけ、リンゴの木やワラを燃料とした。ただし、姉によると「ママたぐカギノハナもあった」（炊飯用の自在鉤もあった）という。カデメシではなく、米だけの飯を食べた。

煙はひどかった。

「村さ入ればにおいして！サルケのにおい！着てらものみなにおいすじゃ。」（この村に入るとにおいがしましたよ。サルケのにおい。着ているものすべて、においがしますよ。）

また、サルケを焚いていない家もあったため、そのような家に遊びに行くと「わい、サルケくせな」（うわ、サルケ臭いなあ）と言われた。

サルケをはじめとする焚き物から出る煙によって生じた煤を取り、油で練って膏薬を作った。かかにつけた。



写真37 廻堰大溜池（津軽富士見湖）後方は岩木山（津軽富士） 原板の両脇をカット

(9)西津軽郡鰺ヶ沢町

④鰺ヶ沢町南浮田 r 氏 昭和8年生



写真38 南浮田地区

r 氏の出身地の南浮田（鰺ヶ沢町）では、「サラケ」と言った。4月下旬の雪が消えたところから5月前ころに、広岡（つがる市木造広岡）の田から採掘した。サラケは小屋や作業場に保管した。あるいは、木に立ててカヤをかけて保管した。

サラケはシボド（炉）で使用した。木の上にサラケを立てるようにして火を着けた。炊飯は、シボドの脇に一種のカマのようなものを作ってナベでおこなった。「シボドのわきさまたぐどご作ってあった。まんづ、わきさカマみてたものつくて鍋で。」（囲炉裏脇に火を跨ぐような所を作っていました。まあ、脇にカマのようなものを作って、鍋で炊きました。）戦前、食糧の供出により米が不足し、カデメシや雑穀、根菜類などを食べた。

「米みなとられでまって、食ぶんきのごしてガッパリとられでまって、カデまぜで食ったもんだ。ガッパリとらいでまって、ダイコン刻んで、芋やったり、ダイコンの葉っぱだのれ。畑にソバ植えて、ヒルマにソバの餅作ったりして。冬だばただ家にいるもんだどごで、そば餅とか芋、皮はいで塩煮して、食べだもんだ。」（米をすべて取られてしまって、食べる分だけ残してガッパリと取られてしまって、混ぜ物をして食べたものです。供出でガッパリ取られてしまって、大根を刻んで食べたり、芋を食べたり、大根の葉っぱなどね。畑にソバを植えて、昼食にソバの餅を作ったりして。冬ならただ家にいるものですから、ソバ餅とか、芋の皮を剥いて塩煮にして食べたものですよ。）

サラケを焚くと、においが染みついた。「火つけば煙あがるよ。家の中。着るものもなもカマリすよ。着るものでも何でもれ、体さつぐ。」（火が着くと煙があがりますよ。家中に。着るものから何からににおいがしますよ。着るものでも何でもねえ、体ににおいが付きます。）

ほどなくストーブの時代になった。「それがら2～3年でストフ流行っての。マギのストフだのた焚いたもんだ。切って干してマで荷車で運んできたおん。みなマでやったもんだねの。いまだばだもそしたのもの。油だもの。ストフさ焚いだ人もあってったよ。」（それから2～3年でストーブが流行りましてね。薪ストーブなどを焚いたものです。薪は切って干して、馬で、荷車で運んできましたよ。みんな馬を使っただけですよね。今なら誰もそのようなものは使いません。灯油の時代ですもの。サルケをストーブで焚いた人もありましたよ。）（2014年10月11日取材）

2. 考察

聞き取りから得られた情報の一部を整理し、この地域におけるサルケ（泥炭）の利用について、従来の調査報告との比較によって浮かび上がる事実や問題について考えたい。（現行の市町村名を記すと長くなるため、以下住所は旧市町村名で表す。）

(1)呼称

筆者の調査では、「サルケ」と発音する人が多数を占め、木造町兼館（事例⑪④、後者は鰺ヶ沢町南浮田出身者である）と、同丸山（事例⑭）で「サラケ」という発音が見られた。木造町土滝で「サラケ」の発音が見られたという報告³¹⁾と併せて考えると、兼館・土滝（この2地域は近隣である）近辺にはこの発音が見られる傾向があるのかもしれない。ただ、これらの発音については、聞き取りのなかで「ル」あるいは「ラ」の発音として筆者の耳に聞こえたということであり、科学的な分析をもとにしたものではない。

また、調査では聞かれなかったが、古くは「ヤチワタ」とも称されていたことが、江戸時代の紀行文に見える³²⁾。「ヤチワタ」という名称がおこなわれていたことについては、柳田國男が『津軽の旅』（1920）のなかで「ヤチワタまたはサルケと称して泥炭を掘り上げ、冬季の燃料に乾し貯えている村が多い」と記している³³⁾。このことから、

大正時代にもこの名称が使用されていた可能性がある。また、この名称は越後地方でも泥炭の俗称としてみられたことが『居住習俗語彙』(1939)に記されている³⁴⁾。

「サルケ」には、採掘する場所の自然条件に由来してさまざまな性質のものが見られた。性質により、また地域や個人により、それらの違いを表現するさまざまなことばがある。

筆者の調査では、田から採るものは、「田のサルケ」(事例②⑤, 稲垣村繁田)「田ザラク」(事例②⑥, 稲垣村豊川)、「アガネンバ」(事例①⑦, 木造町越水、ただしこれは文脈から判断すると、サルケ単体を指すというよりもサルケの採れる層を含めたより大きな範囲の層を指すものとも思われた)などの呼称があった。これに対し、湿地から採るものは「ヤジのサルケ」(事例②⑧, 稲垣町繁田)「ボヤリ」(事例②⑨, 木造町豊川)などの呼称がみられた。他に「ツルメクサルケ」と「ザラメクサルケ」(五所川原市長富)、「ボヤケサルケ」と「ネンドサルケ」(木造町山吹)という呼称もあったといわれる³⁵⁾。また、両者を区別する語彙はなくても、「土のようなサルケ」「パサパサというサルケ」(事例③, 五所川原市川山)というように、質的に異なるものとして認識されていた。

「サルケ」の呼称の由来について、山田秀三はアイヌ語を起源とするものであるとしている³⁶⁾。アイヌ語の「サル」(sar)は葎などが生えているような所を指し、サリ、サル、サロなどのつく地名として、佐呂間(サロマ)、長流(オサル)、サリキなどの例があり、いずれも湿原地帯であるという。東北地方では、秋田県の尾去沢(オサリザワ)、猿間(サルマ)、岩手県の長流部(オサルベ)などを例として挙げている。そして、青森のサルケについて「サルという詞が、東北地方の普通名詞の中にも残っていて猿毛になったのではなかろうか」と推測している。

この説を受けて松木明も「アイヌ語サルキ(saruki)にもとづく」ことばであるとし、「サルガ(猿賀 南津軽郡)、シャリキ(車力 西津軽郡)などの地名もサルケと同じ意味であろう」としている³⁷⁾。

焚いたあとの灰の色に由来するという説もある。猿の毛の色にちなむというものである。『新撰陸奥国誌』(1876)には、「其焚し灰黯赭色にして獼猴の色に似たるにより猴毛と呼ぶなり」³⁸⁾と記される。また、森山泰太郎は「掘り上げた泥炭は乾くと赤すすけた色になり、猿毛という文字の印象がぴったりである」と述べている³⁹⁾。菅江真澄は秋田県横手市田村の泥炭について『雪の出羽路』(文政七～九年)のなかで「二番堀りは綿うにのごとく品しなよから下ず、その土の色赤し」「赤根子にして品やゝ劣れり」(傍点筆者)などと記している⁴⁰⁾。

(2) 質

ヤジ(湿地)や溜池から採掘されるサルケは、比較的密度が粗く、乾燥すると草のように軽くなるものが多かった。着火しやすく、勢いよく燃え上がるものの、燃え尽きるのも早かった。田から採掘されるサルケは緻密で固く重かった。火は付きにくいものの、炭火のようにじわじわと燃え続ける性質があった。

用途にもよるのだが、後者が「よいサルケ」であると判断される場合が多かった。これは、筆者の調査や他の報告書の事例からも明らかである。

ただし、例外もある。筆者の調査では、田から採掘されるサルケ(アガネンバを含む)は、湿原から採掘されるサルケよりも相対的に価値の低いものとして語られた(事例①⑩, 木造町越水)。他の資料によれば、五所川原市長富では、「溜池からよく産するが、早く燃えてしまう。岩木川の西側地域のヤジからとれるものが火持ちがよかった。」⁴¹⁾と語られ、また森田村では、溜池から産するものは土混じりで質が悪く、木造町吉見以北のヤジから採れるものが良質であったと語られている⁴²⁾。これらによれば、ヤジ(湿地)にも緻密で火持ちの良いサルケが産出し、それを良質であると認識していたことがわかる。他にも、木造町吉見では「ヤジのサルケのほうが良質だった」「良いサルケはガスを燃した時のような炎をたてた」(燃え上がるサルケのほうが良い)⁴³⁾と語られたことが文献に記されている。

つまり、使用者がどのような火を求めるかによって、それらの善し悪しが定められたのであり、何が良質かは一概に言うことはできないということである。また、当然のことではあるが、固くて緻密なサルケは必ずしも田から産出するわけではなく、湿地からも固くて緻密なサルケは産出したのである(現在田となっている場所は古くは概ねヤジであった)。

「田のサルケのほうが良い」「ヤジのサルケのほうが良い」という判断は、あくまで採掘する人が、その人の目的に適った性質を持つサルケをどこから採掘するかによって、場所とサルケの性質を関連づけたのであって、それを一般化することはできない。ただし、総合的にみると、炭火のように持続する火を求める人々が多かったため、固く緻密なサルケが良質であると考えられる人が多く、それは田の下から産出される傾向が高かったがゆえに、「田のサルケを良質のもの」とする認識が、この地方ではより一般的であつたらしいといえる⁴⁴⁾。このことは、サルケの用途が主に冬季の暖房であり、持続する火が求められた一方で、調理などで短時間に強い火力を必要とする場合には、稲(ワラ)や大豆(マメガラ)などの他の燃料を選択することも、地域や家庭によっては可能であったことに関連すると考えられる。

「よいサルケ」を産する土地には、他地域から採掘に訪れる者や、採掘されたものを買い求めに来る者があつた。

古くから良質のサルケを産する場所として知られたのは木造町柴田地区で「柴田さるけ」のブランドで知られた⁴⁵⁾。

(3) 掘る道具と深さ、切り取り方

サルケの採掘は、場所的な条件により左右される。湿地や溜池の場合には比較的容易に深く採掘することが可能であるが、いっぽう、田地から採掘する場合は耕土の下を掘る必要があった。この耕土は、津軽平野を流れる岩木川や十川によって運ばれ堆積したものが多く、粘性に富む良質の埴土である。埴土が厚い場合には水稻栽培に対する影響が少なく、埴土が薄い場所に比べて水田としての土壌条件は比較的良好であると言えるが、逆にサルケを採掘するには厚い埴土を除く手間をより多く要することになる。また、元来排水不良の土地柄、採掘により土地が更に低くなることは望ましいことではない。よって、田から採掘する場合には、例えば「表土の下を一尺弱四方に1枚分」（事例②⑤、稲垣村繁田）にとどめた。表土の厚さを見極めるには知識と経験が必要であり、「ホンズねやぶサルケ掘るてばただでない」（事例②⑥、稲垣村豊川、頭の悪い人がサルケを掘るのは容易でない、の意）のであった。採掘により水田が低くなることを防ぐための客土をおこなったが、これは同時に土壌の改良をも兼ねていた⁴⁶⁾。また、田の位置が高いところでは、むしろ田を低くすることが灌漑条件の改良につながる場合もあった⁴⁷⁾。

いっぽう、湿地や溜池では腕一本分、つまり田のサルケの2段分を一度に掘り採ったり（事例②⑤、稲垣村繁田）、場所によっては4～5段分採るところもあって、田よりも深く掘る傾向がみられた。採掘跡は「キリッパ」と呼ばれ、子どもが落ちて溺死することもあるほどの深さであった（事例③①、森田村床舞）。

サルケの採掘は「サルケ切り」とも称されるが（事例③②、木造町林）、上述のような条件にあう適切な道具が選ばれた。一般的に「カナベラ」「スコップ」などは柄の付け根から刃先までの長さが比較的短く、一度に深くまで切り進めないものである。いっぽう、「テンツキ」（事例②②、五所川原市長富、事例②⑥、稲垣村豊川）「テツキ」（事例③⑧、木造町柴田）「テツキ」（車力下牛潟）「平べったい道具」（事例③③、木造町丸山）「末広がりの平鍬」（事例③④、木造町丸山）「四角でまっすぐ切れる道具」（事例③⑦、木造町越水）「柄の先に平たい鍬のついたもの」（事例③⑤、木造町川除）「鍬のようなまっすぐな刃のついた道具」（事例③⑨、中里町富野）などは、柄と並行に比較的長い刃が付いたものであり、深く切り込みを入れることができた。聞き取りでは溜池やヤザで使用されたという証言が多かった。

また、「タザ」と称される道具はタノクロ（畦）を切るのに使用されるものであるが、地表に生えた植物の茎や根を切り、サルケの採掘を容易にするために用いられていた（事例③⑧、木造町柴田、事例②⑥、稲垣村豊川、事例④①、鶴田町木筒）。

切れ目を入れたものは手で持ち上げる（事例③⑨、中里町富野）場合もあれば、クワで上げる場合もあった（事例②⑥、稲垣村豊川）。

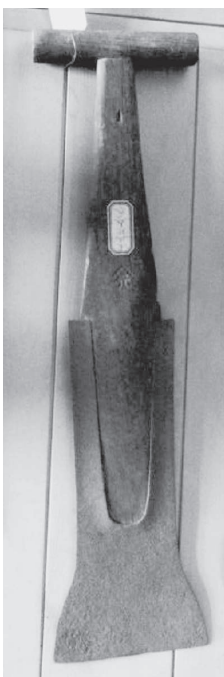


写真39

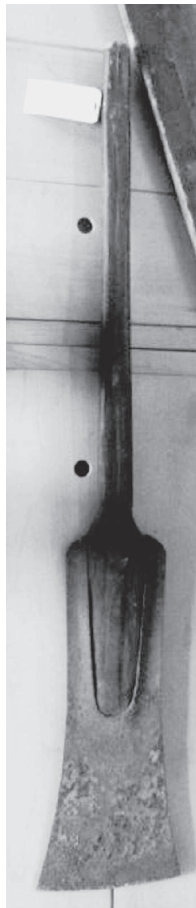


写真40

写真39, 40 「ケンジキ」(カナベラ)

鶴田町歴史文化伝承館蔵、資料名は同館による。(筆者撮影の写真をトリミング加工したもの)

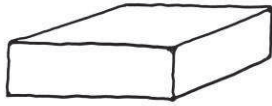
写真41 名称なし(サルケの採掘に使用)

青森県立郷土館蔵、つがる市森田町床舞 f氏寄贈

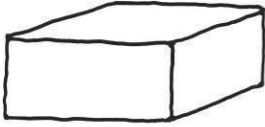


写真41

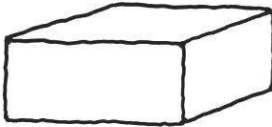
図14 切り方のいろいろ⁴⁸⁾



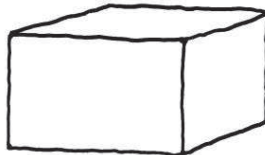
五所川原市川山 35-6cm×3-4寸



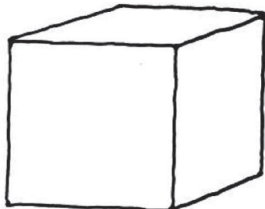
鶴田町木筒 25-30cm四方×15cm



稲垣村豊川 1尺四方×5寸



木造町柴田 30cm四方×20cm

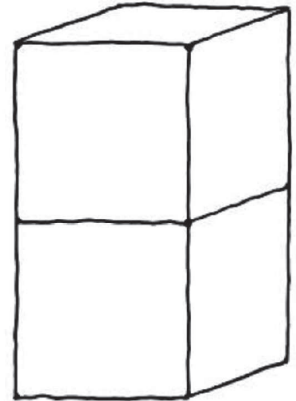


中里町富野 30cm四方×30cm

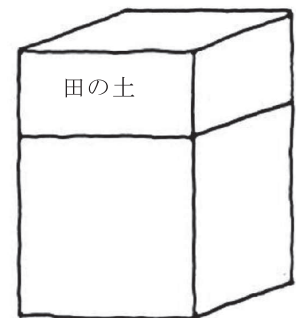


(参考)『新撰陸奥国誌』

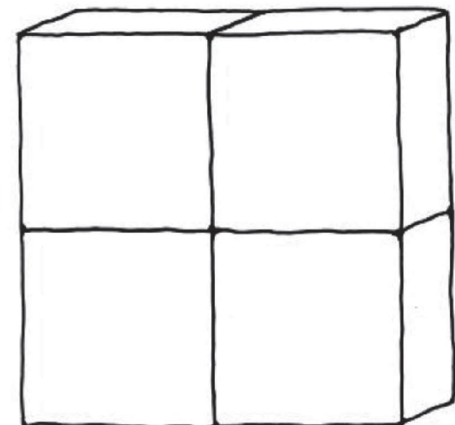
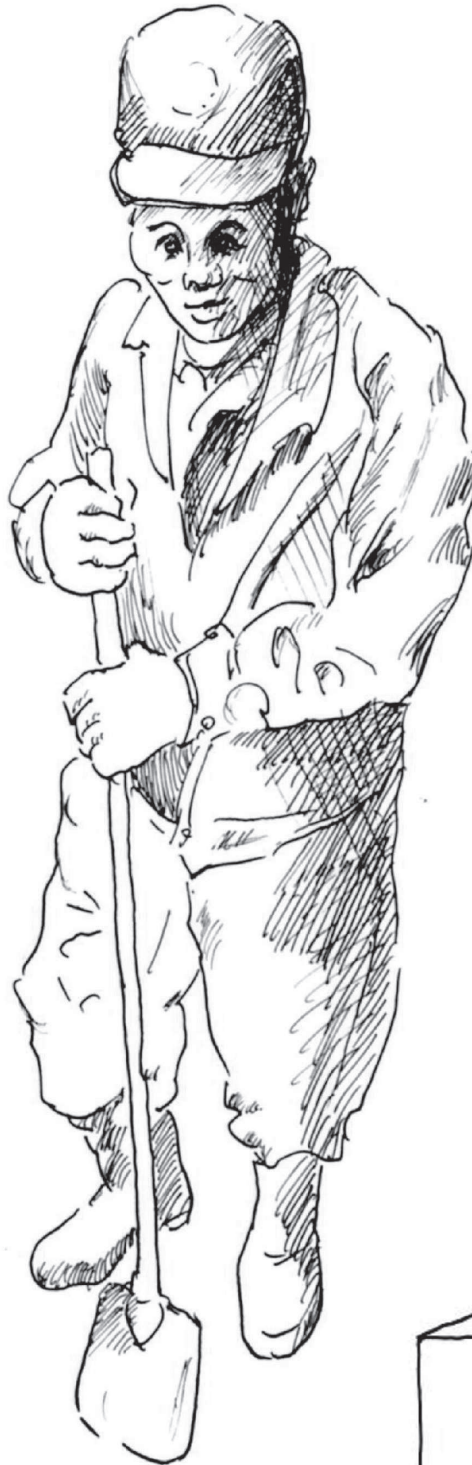
『新撰陸奥国誌』では、長さ2尺×幅6-7寸×厚さ4-5寸という記述がみえる。⁴⁹⁾
(場所は、旧稲垣村豊田、繁田、再賀方面)



稲垣村繁田(竹) 1尺弱×1尺弱



稲垣村繁田(田) 30cm×H30cm



車力村下牛湯 30cm×20cm

(4) 掘る場所と時期

採掘の場所と時期には関わりがある。田から採掘する場合には田植えの時期と関連し、溜池から採掘する場合には灌漑用水の使用時期と関連する。

A, 田からの採掘

五所川原市川山（事例③）、金木町嘉瀬（事例⑤）、木造町兼館（⑪）、木造町丸山（事例⑬）、木造町越水（事例⑰）、稲垣村繁田（事例⑳）、稲垣村豊川（事例㉑）、稲垣村沼崎（事例㉒）では、田からサルケを採掘していたことが確認できた。田から採掘する場合は、稲作との関係から、田植え前におこなわれることが多かった。「春先はサルケ切りだ」というのが決まり文句であった（事例㉓、木造町林）。

『岩木川流域の民俗』（2008）および『青森県史資料編民俗・津軽』（2014）では、いずれも、田から採取する例として旧車力村車力の例のみを掲げているが、その時期は「夏」であったという⁵⁰⁾。これはどちらかというと特殊な例である。筆者の調査事例を含め多くの報告書にみられる⁵¹⁾とおり、田から採掘する場合には雪どけ後から田植え前の時期におこなわれることが多かった。なぜなら、田に苗を植えた状態でサルケを採掘することは難しいからである。行われるとすれば休耕田だろう。ちなみに秋田県横手市（田村）では「ネッコ」（泥炭）の採掘の時期には「春掘り」と「夏掘り」があった。後者は二番草取りと三番草取りの合間におこなわれた⁵²⁾が、田村における「ネッコ」の採掘場所は田ではないため、稲作の作業の合間の「夏掘り」が可能であった。

B, 湿地からの採掘

木造町丸山（事例⑭）、同川除（事例⑮）、同柴田（事例⑯）、稲垣村下繁田（事例㉔）、同豊川（事例㉕）では湿地からサルケを採掘していたという証言があった。湿地から採る場合には溜池や水田のように時期的な制約がないため、さまざまな時期におこなわれていた。田植え前から盆前後、サナブリ終了後、稲の刈入れ後から翌年3月にかけて、などの事例がみられる。

C, 溜池からの採掘

二ノ沢溜池（事例①②、五所川原市長富）、清沢溜池（事例⑤、金木町嘉瀬）、大溜池（事例⑨、木造町館岡）、丸山溜池（事例⑬、木造町丸山）、緩沢溜池（事例⑯、木造町越水）、溜池（事例㉖、車力村下牛潟）、狄ヶ館溜池（事例㉗、㉘、㉙、森田村床舞）、廻堰大溜池（事例㉚㉛）、鶴田町木筒）からサルケを採掘していたことを確認した。採掘の時期は、水田に水を入れる前には水位が高いため、その後に水位が下がってからおこなわれた。お盆前から稲の収穫後の秋であった。

(5) 乾燥と運搬

採掘直後のサルケは水分を含むため、燃料とするには乾燥させる必要があった。サルケを採掘した場所の近くで乾燥させる場合と、自宅に運んでから乾燥させる場合の2通りがある。筆者の聞き取りでは、前者は9例（金木町嘉瀬、木造町林、同丸山（2例）、同越水、同柴田、森田村床舞、旧中里町竹田、鶴田町木筒）、後者は3例（木造町兼館、同越水、鶴田町木筒）を確認した。

前者が多いのは、乾燥前のサルケは水分を含むため重く、乾燥後に運搬したほうが負担が軽減されるということもその理由のひとつであると考えられる⁵³⁾。この場合、切り出されたサルケを運び、積む作業には女性や子どもがあたった。このことについてはあらためて(11)で触れる。後者には、自宅に保管することで盗難の可能性が低くなることにメリットがある。

同じ地域に住む人々でも、個人によってどちらの方式でおこなうかはまちまちだが（事例⑯⑰、木造越水、事例⑳㉑、鶴田町木筒）、全体の傾向としては、乾燥させてから運



写真42 サルケニオ 昭和33年夏、津軽地方 佐々木直亮氏撮影
青森県立郷土館蔵（写真原板にある上下の黒地は削除した）

搬することが多いようである。

乾燥させる際に、「ニオ」のように高く積み上げて干す人もあった。これを「サルケニオ」という。聞き取りでは木造町丸山で「サルケニオ」ということばを確認した。このことばは、『森田村生活誌』(1982)のなかにも確認できる⁵⁴⁾。「秋の終わってから冬のはじめにかけて雪の降る前に、一冬に焚く煉瓦状に切ったサルケを家の周囲に高く積み上げておけるのは、ちょっとよそでは見られない壮観であった」⁵⁵⁾というように、サルケを高く積み上げ、ガツキ(マコモ)やワラ屋根をかけて乾燥させる様子は、この地方の風物詩でもあった。積み上げて乾燥させる方式が一般的なものであるという認識は、例えば『火の昔』(1944)の「田の底から掘り出して煉瓦状に切り、高く積み上げて置いて乾かしてから焚きます」⁵⁶⁾という解説にもみられる。ただし、筆者の聞き取りでは、立てかけたり(事例⑩, 木造町兼館)、「スモコトラヘルかたち」にして乾燥させたり(事例⑤, 金木町嘉瀬)、自立させておき、ひっくり返す作業を繰り返す(事例②④, 車力村下牛潟)など、個人によってその方式はさまざまであった。積んで乾かす方式は多くおこなわれていたとしても、必ずしも普遍的なものではない。

運搬は馬や人がおこなった。江戸時代の文献には、旧暦8月の秋口に「うまにつけて行」ったことが記される⁵⁷⁾。人力による運搬の際には5枚1セット(事例⑫, 木造町林)、20枚1セット(事例②④, 車力村下牛潟)で運んだという事例があった。1切れの厚さや運ぶ人の能力によりさまざまであったと考えられる。また、商品として購入する場合には、乾燥済みの束ねられたものを購入するが多かった。『五所川原市史』(1993)には次のように記されている。「裁断したサルケを二枚ずつならべ、高さ二尺に積んだものが一マロであった。六マロで一駄という。秋の農作業が一段落すると売りに行く。雪が降るとソリに五、六駄つけて売りにいった。遠くは梅田、鶴田方面へ行ったものであった。一駄いくらで売り、別に売り声などを出さなくてもよく売れたものだという。毎年決まった人が買い付けに来る場合もある」⁵⁸⁾。(注:「マロ」とは「束」^{たば}の意)

(6)採掘の権利、販売と流通

「良質」とであるとされるサルケは他村へと流通した。五所川原市川山では自分で採掘したもののほかに、木造町丸山のサルケを購入している(事例③)。丸山では木造周辺の村々から親戚を頼って掘らせてもらいに来たという(事例⑬)。木造町川除でも採掘料を払って近隣の湿地から採掘したといい、またそれ以前には木造町豊川の親戚を頼って採掘させてもらった(事例⑬)。木造町柴田の昔からサルケは評判がよく「柴田サルケ」のブランドで知られ、他村からも買い求めに来たという。100枚〜120枚ほどで米1俵の値段となったという(事例⑧, この場合のサルケ1枚のサイズは30×30×20cm)。なかには採掘と販売をなりわいとする者もあり、その利益は家1軒が建つほどであった(事例⑤、稲垣村下繁田)。

利用価値があり、収益に繋がるものであるから、採掘に関する権利や制限が定められている場合があった。丸山溜池(木造丸山)には採掘場所の指定があり、また各家の持ち分も決まっていた(事例⑬)。木造筒木坂では勘助溜池からサルケを採掘したが、「家ごとに、サルケを切る場所は決まっていた。」⁵⁹⁾という。

津軽地方の村と村の間で、燃料(薪、サルケ、その他)がどのように移動したかについて知ることは今後の課題である。

(7)用途

サルケは第一に燃料、なかでも暖房用の燃料に用いられる。ただし、多くの人々が煮炊きや炊飯の燃料として利用していたことを忘れてはならない。このことにはっきりと触れている書物は少ない。『新撰陸奥国誌』(1876)に「泥炭を采て炊爨の用となす」⁶⁰⁾と記されるが、『青森県史資料編 民俗 津軽』(2014)をはじめ近年刊行された調査報告書には管見では見いだすことができなかった⁶¹⁾。例えば、サルケをさかんに利用した地域のひとつである再賀地区(旧稲垣村)の調査報告書である『再賀の民俗』(1998)では、「飯炊き」の項にはサルケによる炊飯について記されておらず、「茅やワラを燃やして飯を炊いている。それでも茅を焚ける家はいいで、茅不足な家ではワラを燃やしている」と記されている⁶²⁾。『青森県史資料編 民俗 津軽』(2014)では、筒木坂(旧木造町)の事例として「冬には暖房用にサルケ(泥炭)をたいた」⁶³⁾、車力(旧車力村)の事例として「暖房用の燃料としてサルケ(泥炭)をたいた」⁶⁴⁾と記され、あくまで「冬季の暖房用」として描かれ、それ以外の用途については触れられていない。『日本の民俗 青森』(1972)でも、「冬の間炉で薪にまぜて燃やすのである」と述べられ、サルケは「冬の燃料」として紹介されている⁶⁵⁾。このように、おしなべてサルケは「冬の暖房用燃料」としての側面のみがクローズアップされる傾向がある。しかし聞き取りをおこなうと、実際は多くの人々がサルケによって炊飯をはじめ日常的な煮炊きにも使用したことがわかった。津軽地方では多くの場合、炊飯をはじめとする煮炊きは炉でおこなわれた。炉でサルケを焚くならば、その火を煮炊きにも使用するの当然である。また、カマドを持つ家のなかにもサルケを使用した例がみられた。「炊飯はカマドにサルケをくべておこなった」(事例⑫, 旧木造町林)という例や、「ハレの日の料理や卵を煮

る場合など特別な場合にはカマドを利用し、燃料としてサルケの燠を利用した」（事例①, 五所川原市長富）「七輪に使用した」という証言（事例⑤, 金木町嘉瀬）もあった。また、風呂焚きに使用する場合もあったらしい（事例②⑨, 森田村床舞および五所川原市長富⁶⁶⁾）。隣県の秋田ではネッコ（泥炭）を風呂焚きに使用した⁶⁷⁾。

サルケはその質によって、力強く一気に燃え上がるものもあり、また炭火のように静かに持続するものもあるという事情が、このようにさまざまな用途に対応する火を提供してくれた。燠になったサルケの上に魚をのせて焙ってオヤツのようにして食べる（事例②⑤, 稲垣村下繁田）、ジャガイモやサツマイモをサルケの下に入れて焼く（事例①⑧, 木造町柴田）、にぎりめしをサルケの下の方の灰の中に入れて焼く（事例①⑨, 森田村床舞）という使い方もあった。

第二に、腐食の途中にある植物遺体であることから、日本各地の例からも推察されるように、サルケは肥料としても利用されていたのではないかと考えられる。『奥民図彙』（天明～寛政年間）には「二三年の内一度春打ヲコシク干候頃日を付焼申候得は、上（ウハ）土斗五六寸やけ灰に相成申候故、其年ハ外にこやし入れ不申候共随分草生見事に出来申候」とあって、火入れを行い表土を5～6寸焼くと肥料が要らないと記される⁶⁸⁾。『こやしと便所の生活史』（1981）では、津軽地方の例として「燃料とすると、薪の場合に数倍する多量の灰を生ずる」ことが、灰肥として利用する際のサルケの利点であったとされる。さらに、乾燥中のサルケに放尿することを繰り返したり、厩の床に泥炭と稲藁を敷き詰めて堆肥を生産したことが述べられている⁶⁹⁾。こういった話はこれまでの調査報告や筆者の調査では見いだすことができなかった。ただし、昭和戦後期に肥料としての商業的利用を検討したという話はあった（事例⑦、旧中里町豊岡）。

第三に、建材やそれに類似した利用方法である。他県の例では『藤枝市史』（2002）に次のように紹介されている。「ソブすなわち草炭層の用途は燃料以外に二種類あった。一つはソブを乾燥させて壁材とし、いま一つは草炭と人糞尿を混ぜて肥料とするというものだった」⁷⁰⁾。岩木川下流域で壁材として利用したという話は調査報告書や筆者の聞き取りのなかでは見いだすことができなかった。積雪の多い地方であることから、土壁は適当でないという事情もある。ただし、乾燥させブロック状に加工したものを「農家の軒下に煉瓦塀のように高く積み上げて」⁷¹⁾「住居の入り口や窓側に高く積み重ね、風や吹雪を防ぐのに役立てている」⁷²⁾というように、保管と同時に一種の断熱材としての役割を期待する用例もあったらしい。筆者の調査では、サルケを軒下で乾燥させたという話を聞いた（事例①⑥、旧木造町越水）。

このほか、ピートモス（園芸用土）として利用する試みがあった（事例③⑦, 旧中里町下豊岡）。県外ではこれを産業化する試みもなされている。たとえば、藤枝市の清里団地のはずれには、現在でもヨシが生い茂っている場所があるが（写真43）、かつてはこのあたり一帯が同様の湿地帯であり、その下は「ソブ」（泥炭）が厚く堆積していた。筆者は調査のなかで、昭和戦後期に「ソブ」を商品として大規模に活用する試みが、行われたという話を昭和9年生まれの男性から聞いた。男性によれば、藤枝市内の某社が商品化したが、結局は販路もなくコストもかさむため挫折したという。また、同地の別の男性によると、昭和20年代に、圧搾機を使って水分を取り去り乾燥させたものを、燃料や肥料として商品化し、成功を収めた業者もあったという。

ちなみに、「ソブ」を標準名で説明する際に、藤枝市在住のこれらの話者は「泥炭」ということばは用いず、いずれも「草炭^{そうたん}である」と説明した。また、「ソブ」とは「草炭」にする前の「生^{なま}もの」である、という説明もなされた。これに類する解釈や説明は津軽地方では聞かれない。ひとびとが「ソブ」を説明する際に、一般的な用語である「泥炭」ではなく、より狭義の「草炭」ということばをあえて用いるのは、この地方で産業として盛んに利用された際に流布したものだろうか。残念ながらかつて「ソブ」を燃料や肥料として生活のなかで使用したという人に話を伺うことはできなかった。そういった暮らしは、話者よりも更に前の世代のものだという。

また、秋田県横手市田村では「田村灰」といって、泥炭の灰を篩にかけてから糊で練り固め、乾燥させたのちに更に焼いたものを「初雪」「初霜」などと称し、特産品としていたことが江戸時代の文献に記される⁷³⁾。

以上のように、県外の事例をも併せて考えると、泥炭の利用は、過去から現在に至るまで、非常に多様なものがあつたと想像される。津軽地方（岩木川下流域）におけるサルケ



写真43 かつては住宅地のあたり一帯にも湿原で、「ソブ」厚く堆積していた。田の奥には現在もヨシが繁茂している（静岡県藤枝市清里）

の利用の多面性について、筆者は把握していない。今後の課題である。

(8)火の操作

A, 着火

サルケは採取場所によって質が異なるため、着火の方法も一様ではない。「草の根がたくさん入ってバホバホしているので、あっという間に着火する」(木造町丸山, 事例⑭)、「田のものはなかなか燃えなかったが、ヤジのものはボサボサして火がつきやすかった」(木造町越水, 事例⑰)「ヤジのサルケは燃えやすいが燃え尽きるのも早く、火持ちは10～15分程度だが、田のサルケは燃えにくいが長く燃え、火持ちは1時間程度だった」(事例⑳, 稲垣村下繁田)などの証言からわかるように、ボサボサしたサルケ(「ボヤリ」「ボヤケサルケ」などと呼ばれる)は比較的着火が容易であったので、着火の際の工夫もそれほど必要ではなかった。対して、緻密なサルケ(場合によってはそれを「田ザラケ」「ネンドサルケ」などと言う)は「(田のものは)なかなか燃えなかった」(事例⑰, 木造町越水)「(田のサルケは)燃えにくかった」(事例㉑, 稲垣村下繁田)ために工夫を要した。具体的には、「名刺1枚半四方に切ったものを木にかけるようにして一尺ほどの高さに盛って中の木に着火した」(事例③, 五所川原市川山)、「拾って来たスギッパで着火した」(事例⑯, 木造町越水)、サルケを斜めに向かいあわせて着火した(事例⑱, 木造町柴田、図15)、「シボドでシバに火を付けた上に重ねて着火した」(事例㉒, 森田村床舞)「ツケギに火をつけ、その上にサルケをのせて着火した」(事例㉓, 鶴田町横范)「ロブズに積み重ねて中に木を入れて着火した」(事例㉔, 稲垣村豊川)などの事例があり、着火しやすいように小さく切ったサルケを、杉の葉や木の上に山盛りにしたり、ハの字に立てかけたりして着火したという。



図15

B, 維持

着火したあとは、火を持続させるために燃料を継ぎ足した。「燃えにくいのが長く燃え、火持ちは1時間程度だった」(事例㉑, 稲垣村繁田)「4個ほどあれば何時間も燃えた」(事例㉒, 森田村床舞)というように、質によって火持ちのよいサルケもあった。ある程度燃えたのちは、たとえば「アグが多くなってくると、崩れる前に5～6枚を足す」(事例③, 五所川原市川山) ことにより「シボドの中に盛りにした状態」(事例①, 五所川原市長富)、「薪の上にサルケを上げて焚く状態」(事例⑨, 木造町館岡)で火を保った。

サルケの火持ちのよさは、原野火災では逆に問題になった。火の気がなくとも、夏の日照りが続くと自然発火して火災を生じ、消火し難いことが、江戸時代の書物にも記されている⁷⁴⁾。地下でくすぶり続け、消えるようではなかなか消えないのである。しかしこの点がまさに燃料としての利点でもあった。近年では、2007年8月29日に旧木造町のベンセ湿原でサルケによる思われる大規模な火災があり、鎮火までに5日を要した⁷⁵⁾。



写真44「東奥日報」2007年9月3日付紙面の一部

東奥日報社掲載許諾済